聖人は貧者にマントを与ふ

聖人は貧者にマントを与ふ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16233299

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, レイラ, ヒュンマフェス

2021.10.17開催ヒュンマフェス・オータム合わせ。秋っぽくしてみたつもり。
戦後ネイル村シリーズのひとつ。激甘要注意。
「村のくらし」novel/15411188や「鴨のロースト」novel/15708926「流星群」novel/15820217と同一線上の話。

作中の祭りや聖人にモデルはありますが、アレンジしてあります。

2021.11.3　シリーズ組み換え。
2021.12.4　るぴこ様user/72775755から頂きました挿絵掲載。可愛らしいミーナをありがとうございました！

聖人は貧者にマントを与ふ

　吹き抜ける風に冷たさが増し、つんとした冬のにおいを感じさせる。
　晩秋のこの時期は、日ごとに寒さが増してゆき、着実な冬の訪れを感じさせた。
　秋の実りの収穫もほぼ終わり、もうすぐ巣ごもりの季節がやってくる。
　ヒュンケルがネイル村で迎える初めての冬だ。
　だが、ここロモス王都では、そんな更け往く秋の寒空を感じさせない熱気で街がにぎわっていた。
　この日、王都付近のネイル村から、このにぎわう都まで足を延ばしていたヒュンケルは、普段とは異なった趣の、浮足立った街の様子に、やや面食らっていた。
　あちこちで、天幕やら装飾やらの準備が進められている。
　ある店の前では、大きな立て看板が路面に寝かされて、店主と思しき男がそこにメニューやらイラストやらを描き、絵筆をふるっていた。また、別の店では、店頭の軒下に飾り付けをしていた。
　町の地図を手に、あちこちで何やら指示をしている人がおり、路上にも目印となる線や矢印が引かれている。
　ヒュンケルは、その喧騒に気圧され、傍らのマァムに尋ねた。
「何かあるのか？」
　すると、マァムは微笑みながら答えた。
「お祭りの準備なのよ。」
「祭り？」
「そう。もうすぐ、ロモスの秋祭りなの。それで、あちこちでその準備をしているのね。」
「そうか・・・。」
　すると、ヒュンケルは、それきり口を閉じた。
　彼が体の前で、両手で抱えた袋の中には、いくつかの店で買い求めたジャムや紅茶といった食料品のほか、幅広のリボンやカール産の毛織物など、王都ならではの舶来品もあった。

たまの王都での買い物だ。二人は、村では決して手に入らないリンガイア産のリンゴジャム、ギルドメイン高地産の紅茶、カールの毛織物などを買い求め、ささやかな贅沢を味わっていた。

もちろん、品物を選んでいたのは、主にマァムだ。そろそろ寒くなってくるので、冬用の厚手のシャツやズボンをヒュンケルにも作ろうと、カール産の手触りのよい毛織物を選んでいたのだが、ヒュンケルは、どれがいいのかわからないという顔で、結局マァムが勧めるものをそのまま受け入れていた。

そんな穏やかなひとときを過ごしていたはずであった。

マァムは、急に口をつぐんだヒュンケルをいぶかしんだ。じっと、耳をそばだてる。とたんに、彼女も肌に何か感じたようで、表情を引き締めた。

背後に人の気配を感じる。人ごみだから当たり前なのだが、視線がはっきりと自分たちに向けられているのをマァムは感じた。

視線の主は、おそらく二人。さほど多くはないが、つかず離れず、一定の距離を置いたまま、マァムたちの後ろをついて歩いている。

何者だろうか。

すでに、大魔王との戦いが終わって数年が経っている。

ヒュンケルは、自分の素性を決して明かさない上、王都には何度も二人で来ているが、これまでは、不審なことは何もなかった。

それでも、彼がかつて魔王軍に所属していたことを誰が知っているのかもわからない。どんな人間が、彼に危害を加えようと企んでいるかもわからない。

これまでも、マァムは、ヒュンケルの身の安全には注意をしていた。

何者だろうか、とマァムはもう一度考える。

自分とヒュンケル、どちらが狙いなのか。

やはり、ヒュンケルだろうか。

だとしたら、自分が彼を守らなければ。

あの厳しい戦いのために、彼の体は今でも万全ではないのだから。

マァムが思索に暮れていると、ヒュンケルが彼女に呼びかけた。

「マァム。」
　ヒュンケルは、そのまま声を落とし、彼女に顔を向けないまま、小さな声で言葉をつづけた。
「気付いているか？」
　マァムも、ヒュンケルに視線を向けないまま、黙ってうなずいた。
　すると、ヒュンケルは、前を見据えたまま、マァムに言葉をかけた。
「次の角で走るぞ。」
「わかったわ。」
　マァムは、やはり彼の方を見ずに答えた。
　二人とも、それまでと歩き方を変えずに、ただ無言で、目の前の角まで歩みを進めた。
　そして、十字に道の交わる交差点に出ると、二人は、何の前触れもなく走り始めた。
「あっ・・・！」
　背後で小さく悲鳴が上がるのを、マァムは耳にした。

　男たちは焦っていた。
　目的の人物を見つけたものの、突然走り去られ、その挙句、見失ってしまった。
「どっちに行ったんだ！？」
　中年の男は焦った様子で、走りながら何度も立ち止まり、左右を見渡した。
　その後ろからは、若い男がついてきて、息を整えながら答えた。
「警戒されたんですかね。」
「だからこっそり後をつけたんだろうが！見失ったら意味ないだろ！」
「仕方ない・・・裏路地も探しましょう。」
「見かけたら教えてくれ。」
　だが、そういって、中年の男が振り返ったときには、今度は、若い男の姿がなくなっていた。
　中年の男は、焦りを隠せなかった。

「・・・おい、お前までどこに行ったんだ！？」
　中年の男は、左右をきょろきょろと見まわしながら、先ほどまで後をつけていた若い男女のカップルと、相方の若い男の姿を探した。
　そのとき、急に背後から、襟首をつかまれた。
「えっ・・・うわっ！！」
　大声を出す間もなく、中年の男は裏路地に引きずり込まれた。
　そして、鋭い暗灰色の瞳に見据えられたまま、胸ぐらをつかまれている自分に気が付いた。
　射るような視線を向けたその男は、中年の男の胸ぐらをつかんだ右手の力を緩めることなく、彼に詰問した。
「何者だ。俺たちに何の用だ。」
　薄暗い路地に、淡く差し込む光が、その男の髪を照らし、銀細工が揺れた。中年の男は、自分が追いかけていた相手に胸ぐらをつかまれてすごまれていることに気付き、愕然とした。
「か、会長・・・。」
　聞き覚えのある声を追うと、その声の主は、やはり追いかけていた桃色の髪の娘に、両腕を後ろ手にされて捻り上げられていた。
　中年の男は、上ずった声を上げた。
「き、気付いて・・・。」
「当然だ。」
　短い回答であるがゆえに、迫力が感じられた。
　ヒュンケルは、中年の男の胸ぐらをつかんだまま、言葉をつづけた。
「答えられないのか。言えないような素性なのか。」
　その暗灰色の瞳が、詰問とともに厳しい光を帯びた。中年の男は震えあがった。だが、己を鼓舞し、声を上げた。
「ま、待ってくれ！怪しい者じゃない！！」
　だが、ヒュンケルは、中年の男の哀願を聞かず、その手を緩めなかった。
「背後から無言で人の後をつけてくるような者が怪しい者ではない、などと言えるものか。」
「そ、それは悪かった！声をかけるタイミングをうかがってたん

だ！！」
「だから何の用だと聞いている。」
　すると、あまりにも意外な言葉が、中年の男の口からこぼれた。
「お、俺たちは、実行委員会の者なんだ！！」
　ヒュンケルは、意味が分からず、聞き返した。
「・・・実行委員会？」
「そ、そうだ！聖マルディィヌス祭実行委員会だ！私はその会長
だ！！」
「本当です！僕も実行委員会のメンバーです！」
　マァムの手元で、若い男が声を上げた。
　マァムは驚いて手を離した。
「本当に・・・？」
　すると、若い男は懸命に、首がもげそうな勢いで、何度もうなずいた。
　そして、上着の袖をめくって、腕章を見せた。
「ほ、ほら！これ！実行委員会の腕章！！」
　マァムはしげしげと若い男の腕と彼の顔を見比べると、改めて彼に尋ねた。
「でも、だったらどうして、こんな後をつけるなんておかしな真似をしたの？」
　すると、今度は中年の男が答えた。
　ヒュンケルはまだ、彼の胸ぐらをつかんだままだった。
「そ、それは、あんたたちにお願いしたことがあって、それで、声をかけるタイミングをうかがってたんだ！！」
「お願い？」
　マァムの問いかけに、中年の男は大きくうなずいた。
「そう！
　あんたたちに、今年の祭りで、聖マルディィヌスと天使をやっていただきたい！」
「・・・は？」
　意味が分からず、ヒュンケルは、中年の男に間が抜けた声で聞き返していた。
　彼の背後で、路上に置いた袋の中から、ごろりと、リンゴのジャ

ムが転がり落ちた。

　娘の家のリビングで、レイラは、笑いをかみ殺しながら、マァムの話を聞いていた。
「それで、結局、断ってきちゃったの？」
　マァムは、レイラに頷いた。
「だって・・・ヒュンケルが絶対にいやだって。」
　レイラは、王都から戻ったマァムたちが購入してきた紅茶を淹れてもらっていた。
　紅茶は貴重品で、高級品でもあったため、たまに王都まで買い物に赴いた時くらいにしか手に入れられなかった。
この日は、マァムたちがロモス王都から戻ると、レイラが、厚く焼いたクレープを持ってきてくれたので、それに合わせて、紅茶を淹れた。厚手のクレープには、二人が王都で買ってきたリンゴのジャムを乗せてみた。
　マァムとレイラは、リビングで向かい合ってティータイムを楽しんでおり、ヒュンケルは、キッチンに立っていた。湯を沸かしたばかりだったので、竈の火を見ていたのだ。
　レイラは、義理の息子に淹れてもらった紅茶で温まりながら、笑みを浮かべ、言葉を発した。
「あら残念ね。私は見たかったわ。」
　すると、キッチンから、ヒュンケルのげんなりした声が聞こえてきた。
「・・・勘弁してください。」
　マァムは苦笑した。
「ほらね。
　ヒュンケルが受けないんだったら、私も受けるつもりないし。
　第一、毎年、天使役って、もっと小さい子がやるんじゃなかったかしら？」
　しかし、マァムの疑問は、ロモスで生まれ育ったレイラにあっさりと反撃された。
「そういう年もあるけどね。成人女性がやることもよくあるわよ。」

すると、マァムは、頬を赤らめて反論した。
「で、でも！さすがに私も恥ずかしいし・・・。」
　つまりはこういうことだった。

　ロモス王都の裏路地で、自分たちの後をつけてきた不審者を締め上げていたヒュンケルは、相手の口から出た言葉の意味が分からず、唖然とした顔で、中年の男を見つめていた。
　代わって、背後にいたマァムが、聖マルディィヌス祭実行委員会会長を名乗る男に問うた。
「・・・それって、パレードの？」
　会長は、大きく何度もうなずいた。
「私たちに？」
　改めてマァムが問うと、やはり、会長は、いっそう大きく首を縦に振り、何度もうなずいた。
「マーケットであんたたちを見かけたときに、イメージにぴったりだって思ったんだ！それで、声をかけて、お願いをしようと思っていたんだが、タイミングがつかめなくて・・・。あまり目立つところでもしにくい話だったし。広場でこんな話をしてたら、市民が集まってきてしまう。」
「それにしたって、こんな風にこっそり後をつけなくてもよかったのに。」
　マァムが同情の混じった声で会長に言うと、彼は済まなさそうに眉尻を下げた。
「め、面目ない・・・。」
　全く二人の会話の意味が分からないヒュンケルは、困り果てて口をはさんだ。
　聖マルディィヌス祭？
　パレード？
　イメージに合う？
　聞き慣れない言葉が飛び交う中で、この目の前の男が自分たちに何を求めているのかがつかめなかった。
「待ってくれ。どういうことなんだ？」
　すると、逆に会長の方が不思議そうな顔をした。

「お兄さん？聖マルディヌス祭だよ？」
　むしろ、なんで言葉の意味が通じないんだというようなニュアンスで、中年の男に聞き返された。慌ててマァムがとりなした。
「あ、彼は、もともとロモスの人じゃないんです。」
「ああ。それで。」
　ようやく、会長は、合点のいく顔をして頷いた。
「ごめんなさい、ヒュンケル、わからないわよね。」
マァムがヒュンケルに言葉をかけ、説明を始めた。
「聖マルディヌスは、二十四聖人の一人で、１１月の前半の守護聖人よ。ちょうど収穫時期と重なるし、すてきな伝説のある人だから聖人の中でも人気があってね。この時期の秋祭りのことを、ロモスでは、昔から、聖マルディヌス祭って呼んで、お祝いしていたのよ。」
「伝説？」
　ヒュンケルに聞き返され、マァムはうなずいた。マァムは言葉をつづけた。
「そう。聖マルディヌスは、もともとは、古代の兵士だったんですって。
　そして、都から戦地に赴くときに、街道で、貧しい老婆を見かけたの。ちょうどこんな１１月の寒い時期だったらしいわ。そのときに、寒空で震えていたその老婆を哀れに思ったマルディヌスが、自分のマントを半分切って与えたんですって。戦いの前だったのにね。それに、当時は貴重なものだったんじゃないかしら。
　そうしたら、その老婆は、ただの人間ではなくて天使だったのよ。天使の報告を受けて、マルディヌスの善行に感じ入った神が、彼を聖人に叙したっていう伝説なの。
　それにちなんで、聖マルディヌス祭では、聖マルディヌスと天使に扮した男女がパレードを先導して、ロモス王城の前庭まで行くのよね。」
　すると、会長が、前のめり気味にマァムの言葉を継いだ。
「そう！その役を、あんたたち二人にやってほしいんだ！！私は毎年、この祭りの実施に関わっているが、あんたたちみたいにイメージにぴったり合う人は見たことがない！」

ようやくヒュンケルは話の内容が理解できた。
　だが、会長の言葉の意味を理解すると、今度は、嫌な予感が胸の内を占めた。
　マァムがさらなる説明を、会長に求めた。
「聖マルディヌス役って、鎧とマントを付けて、馬に乗ってパレードを先導・・・でしたよね？」
「そう。」
「天使役って・・・。」
「そっちは、白いドレスと羽根をつけて、屋根のない馬車に乗ってもらっている。」
　マァムと会長の会話を、異世界の出来事のように聞きながら、ヒュンケルは、自分がその話の当事者になっていることが実感できなかった。
　だが、一方で、冷静な頭で、その内容を理解すると、低い声で言葉を絞り出した。
「・・・絶対にダメだ。」
　すると、心底、ショックを受けたような顔をして、会長が声を上げた。
「そ、そんなあ・・・。イメージにぴったりなんだよ。」
「何といわれても御免だ。」
「そこを何とか！！」
　食い下がる会長に、マァムは苦笑した。
「彼が受けないのなら、私も遠慮します。」
　すると、ヒュンケルはマァムに振り返った。
「お前はやればいいじゃないか。天使、お前に似合うに決まっている。」
　しかし、マァムは静かに首を横に振った。
「あら、あなたがやらないなら意味がないわ。
　それに、恥ずかしいし・・・。」
「そうか。」
　マァムは、改めて、会長に向き直ると、申し訳なさそうな顔をした。
「お話、ありがとうございます。

ですが、ご遠慮させていただきます。」
「せめてもうちょっと考えてくださいよ！」
「彼は、一度こう決めてしまったら、譲らないので。
　でも、お祭り、楽しみにしていますね。」
　マァムは、必死に食い下がる実行委員会会長に丁寧に断りの挨拶をした。

　ことの顛末をマァムから聞いたレイラは、おかしそうに笑いをかみ殺しながらティータイムを過ごしていた。
　レイラは、リンゴのジャムを乗せた厚手のクレープを口に運びながら、娘に尋ねた。
「お祭り当日は行くの？」
「ちょっと迷ってるわ。すっかりヒュンケルが警戒しちゃって。」
　当の本人は、キッチンで困った顔をしている。
　この地上を丸ごと吹き飛ばそうとした大魔王に挑んだ闘志の使徒が、祭りの仮装をもちかけられて必死で断り、さらなる勧誘を恐れている様子が、レイラには微笑ましく思え、また可愛らしく感じられた。
　レイラは苦笑しながら、娘に言葉を返した。
「行ってくればいいじゃない。せっかくだし、ヒュンケルは初めてでしょう？さすがに当日になって声をかけられることもないでしょうし、楽しんできたらいいわ。」
「そうね・・・。」
　レイラの言葉に、マァムはうなずいた。
　マァムは、聖マルディヌス祭については、毎年楽しみにしていた。
　特に、各村々から集まった人々のパレードは圧巻で、各村の伝統的な装束に身を包んだ人々が参加するその様は見事だ。
　それに何よりも、そんな祭りの様子をヒュンケルに見せたかった。
　これまであまり市井の生活に縁のなかった彼に、少しずつ、知ってもらいたいのだ。
　穏やかな暮らしの中にある、おいしい料理、街の人が楽しみにし

ている行事、季節の移ろい。
　そんなものを、戦いに明け暮れてきた彼にも感じてほしかった。

　祭りの当日は、晴天に恵まれ、抜けるような青空が広がっていた。
　寒さは一層厳しさを増し、吹き付ける風に身を震わせる季節になってきたが、幸い、この日は日差しに恵まれ、比較的過ごしやすい陽気だった。
　そうは言ってもすでに肌寒い季節だ。外套は手放せなかった。
　マァムに説得されて、聖マルディィヌス祭に赴いたヒュンケルであったが、前回王都を訪れたときよりもさらに人出も増し、様々な装束に身を包んだ人々を前に、かつて大魔王に挑んだ闘気もなすすべはなく、すっかり委縮していた。
　すると、どうしていいのかわからない様子で佇むヒュンケルの傍らで、マァムが感慨深げな声を上げた。
「懐かしいなあ・・・子どものころ、父さんや母さんとも来たのよ。」
「そうか。」
　ヒュンケルが相槌を打つと、マァムは言葉をつづけた。
「うん。
　ほら、今日は、民族衣装の人が多いでしょう？あの人たち、パレードに出るのよ。」
　言われてみると、普段、ネイル村やロモス王都で見るよりも華やかな服装の者が多い気がした。
　特に女性の衣装は可愛らしい。
　たっぷりとしたギャザーを寄せた長めのスカート。
　ふんわりとした袖。
　スカートの前に下げたエプロン。
　そして、男性は、少しゆったりとした長ズボンに、白のシャツ、ベストを着用している者が多かった。
　よく見ると、グループごとに色彩が異なっていた。
　スカートの色や柄、それを彩るレースや刺繍テープ、髪のまとめ方やそれを彩るリボンなど、様々なバリエーションが見る者の目を

楽しませる。
　不思議そうな顔をするヒュンケルに、マァムが言葉を足して説明をした。
「あの人たちは、それぞれの村や町ごとに分かれているのよ。ロモスのそれぞれの村や町にはね、伝統的な染色とか、柄とかあってね。それで、この日は、自分たちの村や町の伝統的な服装で来ているのよ。
　私も子供のころ、ネイル村の衣装で参加したことがあったわ。」
「マァムが？」
「うん。でもね、ネイル村の衣装って、結構可愛らしいから、今考えると恥ずかしいけどね。今年はミーナたちが出てくれているわ。あっ、ほら、あそこに。」
　マァムが指さした方を見ると、１０歳くらいの少女が、こちらに向かって手を振っていた。
　大きなリボンで後ろ髪を束ね、ギャザーの寄せられたふんわりとしたロングスカート、大きな襟とバルーンスリーブの袖口には、白いレースがあしらわれている。スカートの上に、透けるレースのエプロンをつけているのが、一層華やかだ。
　ミーナたちネイル村の一群には、ヒュンケルが見知った顔の者が何人もいた。ヒュンケルも、彼らに軽く手を振ると、マァムを顧みた。
「いまでも、十分、お前に似合うと思うが。」
　すると、たちまち、マァムは頬を赤らめた。
「もうっ！すぐそういうこと言う！」
「俺は思ったとおりに言っているだけだ。」
「・・・分かってるわ。だから余計に・・・恥ずかしいの。」
　そう言って照れるマァムも可愛らしいと思ったが、ヒュンケルは、それ以上は、口に出すのをやめた。
　マァムは、頬を染めてヒュンケルから視線を外していたが、少しすると、彼を顧みて、右手を差し出した。
「お城の前庭まで行きましょう。そこが一番、見ごたえがあるわ。」
　柔らかい笑顔が彼に向けられていた。

その彼女の姿に、ヒュンケルは感慨深い思いがした。
　この手に何度導かれてきただろうか。
　何度、救われてきただろうか。
　いまもまた、彼女は、市井のくらしを知らない自分に、新しい世界を見せようとしてくれている。
　ヒュンケルは、穏やかに微笑むと、その手を取った。
「ああ。連れて行ってくれ。」
　その言葉に、マァムは、嬉しそうに微笑んだ。

イラスト るぴこ様（https://www.pixiv.net/users/72775755）

鮮やかな民族衣装の人の流れは、城へと向かって伸びていた。
その両脇には、見物客がごった返している。
二人は、人ごみではぐれないように、手をつないだまま足を進めた。
そのパレードの沿道には、いくつもの出店が並んでいた。
パンを売る店。
チーズやハム、骨付きローストポークを売る店や、ビールやホットワインの店、アクセサリーやレースといった装飾品を売る店など様々なで店が立ち並び、いっそう、祭りのにぎやかさに華を添えていた。
その中で、髪飾りを売る小さな出店を見つけると、ふと、ヒュンケルは足を止めた。
それは、秋の花を乾燥させたドライフラワーで作った髪飾りだった。小さな野の花を乾燥させ、それを蝋で覆い、台座につけて髪飾りにしていた。
不意に足を止めたヒュンケルの視線の先を、マァムは追った。彼らしくなく、実に可愛らしい薄桃色の髪飾りにヒュンケルが目を止めているのに気が付いた。
「ヒュンケル？」
マァムが尋ねると、ヒュンケルはつぶやくように答えた。
「・・・いや、お前の髪と同じ色の花だな。」
見ると、髪飾りには、小さな毬のような薄桃色の花があしらわれている。薄桃色の花が中心となり、それよりも少し濃い色の花が添えられ、色彩のコントラストを奏でていた。
その花には、マァムも見覚えがあった。
「あ、あの花・・・。」
すると、マァムが何か言うよりも早く、ヒュンケルが店主に声をかけた。
「これを一つ、見せてもらえるか？」
「はい、どうぞ。」
店主は、明るい声で、ヒュンケルに髪飾りを一つ手渡した。

ヒュンケルは、つないだ左手を離さないまま、右手で受け取った。
　ひとつひとつ、丁寧に作られているのであろうそれは、ヒュンケルの武骨で大きな手には不釣り合いに華奢で小さかった。
　ヒュンケルは、少し戸惑った様子で、マァムに言葉をかけた。
「・・・すまない、マァム。俺のわがままなのだが・・・これを一つ、買ってもいいか？
お前につけてほしい。」
　マァムは驚いた。
　ヒュンケルは、自分自身が着飾ることをしない。マァムがおしゃれをすると褒めてくれるが、お前はそのままが一番かわいいなどと、対処に困る台詞を平気で口にする。
　その彼が、マァムにこんなお願いをすることは珍しかった。
　マァムは、嬉しくなって微笑み返した。
「ありがとう、ヒュンケル。かわいい髪飾りね。」
　その言葉に、ヒュンケルは、心からほっとしたような顔を見せた。そして、出店の店主に金を払った。
　店から少し離れると、彼は、マァムの薄桃色の艶やかな髪にそっと触れた。
　マァムは、目を閉じた。
　ヒュンケルの手が彼女の髪を取り、そこに、そっと、同じ色の花が飾られた髪飾りが彩を添える。
　マァムの髪を取り、髪飾りを差す、その大きな手の感触が、マァムには実に心地よかった。
　少しだけ恥ずかしく、髪に触れられるだけでどきどきする。
　その心地よさに、体が震えた。
　やがて、彼の低い、穏やかな声が聞こえた。
「似合うな。・・・可愛らしい。」
　マァムは、うつむいたまま、目の前の彼の左手を、両手で握った。なかなか顔が上げられなかった。その彼女の手を、ヒュンケルの手が、包むように握り返した。
「行くか。」
　マァムは黙ってうなずいた。

そしてまた、二人は、城の中庭へと歩みを進めた。
　マァムは、歩きながら、手をつないでいない方の左手で、そっと、髪飾りに触れた。
　ヒュンケルは、自分が選んだこの髪飾りを、マァムの髪の色だと言った。それだけでも、恥ずかしくなるくらい嬉しかったのだが、マァムの心を揺るがしたのはそれだけではなかった。
　髪飾りには、薄桃色の花を引き立てるように、少しだけそれよりも濃い色の同じ種類の花が添えられていた。その色が、かつて、決戦前に見た、彼の魂の色に似ていたのだ。
　そして、もう一つ。
マァムは尋ねた。
「ヒュンケル、この花、知ってたの？」
すると、ヒュンケルは、何か古い知識や記憶をたぐるように、沈黙した。やがて、ぽつりと呟いた。
「・・・昔、先生と・・・。」
だが、彼はそこで言葉を切った。
「・・・いや、気のせいだな。」
それ以上は、答えなかった。
マァムもそれ以上、尋ねなかった。
彼女の思考も、記憶の海に沈んでいた。
―・・・もしかして、知っているの？この花の意味・・・。
　マァムは、以前、レイラとともに村の近くの森で見た、花畑を思い出していた。
　記憶の中で、いまよりも少し若いレイラが、いまよりも少し幼いマァムに呼びかける。
　目の前には、この髪飾りと同じ、毬のような花が群生し、花畑を作っていた。
　レイラの言葉が、マァムの脳裏に蘇った。
―この花の意味はね、『色褪せぬ愛』。
　誰の心の中にも、そんな想いがあるかもしれないわね・・・。
　そう言って、切なげに遠くを見たレイラの目には、ただ一人の男の姿があったのだろう。
　この髪飾りにあしらわれた花は、あのとき、レイラと見た花畑と

同じ姿をしていた。

　ロモス城の前庭には、広い舞台が組まれていた。遠くからでも、その檀上がよく見える。
　太陽が南中を過ぎて傾き始め、少し日が陰ってくると、途端に、風が冷たくなってきた。
　祭りもそろそろ終盤に差し掛かり、吹く風は冷たくとも、人々の熱気は勢いを増していた。
　遠目から壇上を見ると、たっぷりとした真綿に縁どられた豪華なマントを付け、冠をかぶった初老の男性が、その中央に立っているのが見えた。
　ロモス王だ。
　小柄な王ではあったが、舞台の中央にあっては十分に人々の目を引く。
　そこへ、王都を練り歩いてきた各村や町から集った人々が順に進んできた。
　その列の先頭には、馬上の騎士と、可愛らしい小さな馬車。
　騎士の男性は、古めかしい鎧を身にまとい、短いマントを肩からかけていた。伝説どおりの、半分だけのマントだ。
　屋根のない、小さな馬車の上には、真っ白なドレスを纏った少女がいた。
　あれが、聖マルディィヌスと天使なのだな、とヒュンケルはすぐに理解した。
　騎士役の男性は、舞台に近づくと、馬から下り、王に向かって恭しく頭を下げた。
　そして、彼は、天使の少女を馬車から降ろして腕に抱えると、舞台前に設けられた階段を一歩ずつ上り、やがて、王の待つ舞台の上に立った。
　隣でその様を見ていたマァムが、ヒュンケルに説明をした。
「パレードを先導した聖マルディィヌスと天使は、王様の前に出るの。そうして、聖マルディィヌスは、陛下に剣を捧げ、天使は、陛下に祝福を授けるのよ。」
　それを聞いて、ヒュンケルはうなずいた。

「なるほど、それで王家の権威と正当性を示すのだな。」
　その言葉を聞いたマァムは、苦笑するしかなかった。
「・・・ヒュンケルって、政治的な思惑、すぐにわかるわね。」
「すまん。野暮だったな。」
　ヒュンケルは困ったような顔をした。魔王軍に長くいた彼は、どうしても裏の意味を読み取ってしまう。
　すると、マァムは、舞台に目を向けたまま、感慨深げにつぶやいた。
「いろいろな意味があるのかもしれないけれど、でも、私は、このパレードの最後って、いつもきれいだなって思ってたわ。」
「そうか・・・。」
　ヒュンケルは、それ以上は言葉を足さなかった。
　日が傾き始め、あちらこちらでランタンが焚かれ始めた。その火が、まるで星のように街に漂う。
　その灯火の中、ロモス王の前に進み出た聖マルディヌスは、跪き、その剣を王の前に示した。
　すると、ロモス王が腰をかがめ、その剣を受け取った。
　王は、聖マルディヌスの剣をまっすぐに天へと掲げた。
　わっと歓声が上がった。
　天使の少女が、王の前でスカートをつまみ、淑女の礼をした。
　そうして、王が右手を差し出すと、その手に、そっと唇を寄せた。
　天使の祝福だった。
　いっそう、大きな歓声が沸き起こった。
　地上の星のようなランタンの明かりの舞う中、ロモス王が民衆に向かって大きく手を振っている。そして、人々もまた、王を称え、聖マルディヌスと天使の祝福に感謝をする言葉が、方々から上がっていった。
　マァムは、壇上の騎士を見つめた。今年の聖マルディヌスは、繊細な顔立ちの、優しそうな若い男性だった。衣装もよく似合っている。
　だが、マァムは、その姿を眺めながら、そこに、別の男性の面を重ねた。そして、ふうとため息をつき、傍らのヒュンケルを見上げ

た。
　マァムの視線に気づいたヒュンケルは、彼女に尋ねた。
「どうかしたか？」
　マァムは、ゆっくりと首を横に振った。
「ううん。なんでもない。
　でも、ちょっと残念だったかなあって。」
　ヒュンケルが、マァムの言葉の意味を測りかねていると、さっと、冷たい風が吹いた。マァムが反射的に身をすくめた。
　それにすぐに気づいたヒュンケルは、自身の外套の肩の留め金を外すと、ふんわりと、彼女の身を外套で包み込んだ。正面から抱きかかえられ、彼の大きな外套に包まれたマァムは、戸惑った声を上げた。
「ヒュ、ヒュンケル・・・。」
　その彼女の耳元に、穏やかな言葉が落ちてきた。
「寒くないか？」
　何よりもその言葉が温かくて。
その心遣いが嬉しくて。
マァムは、ぎゅっと、彼の胸元のシャツをつかんだ。
「・・・ううん。ヒュンケルがこうしてくれているから、寒くない・・・。」
「そうか。」
　マァムは、ヒュンケルの外套に包まれたまま、顔だけで振り返り、その面を舞台に向けた。
　そして、自身の伴侶に呼びかけた。
「ヒュンケル。」
「なんだ？」
「私ね、あなたの方が素敵なのになあ・・・ちょっと残念だったかもって思ったんだけど・・・こうしてあなたを独り占めできるのって嬉しいなあって思っちゃった。」
　そうして、少し悪戯めいた顔で、ヒュンケルを見上げた。
「寒さにマントを分け与える。
　聖マルディィヌスみたいね。」
　すると、ヒュンケルは、ふっと笑みを浮かべた。

「・・・知らなかったのか？
　お前は、ずっと、俺の天使だったんだ・・・。」
　言葉の終わりは、祭りの喧騒に飲まれて消えていった。
　だが、そのぬくもりは、いつまでもマァムを包み込んでいた。